

2022年6月12日（日）主日朝礼拝説教

『霊から生まれた者』井上隆晶牧師

テトスの手紙3章1～7節、ヨハネ福音書3章1～9節

### ①【ニコデモの聖なる憧れ】

ファリサイ派に属し、国会議員でもある、歳をとったニコデモという人が、ある夜イエス様のもとにやってきました。ファリサイ派というのは教えや規則を忠実に守ろうとするユダヤ教の中のグループです。さて彼が夜やって来たのは人目を避けてのことでしょう。イエス様と親しくする者は社会から追放されることになっていたからです。彼はこういいました。「ラビ、私どもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、誰も行うことはできないからです。」(2節)「ラビ」とは「先生」という意味です。あなたがしている業を見ると、神があなたと共におられるとしか思えません。私はあなたを信じたいのです、といったのです。ではなぜ彼はイエス様のもとに来たのでしょうか。彼は長い間ファリサイ派の教えを信じ、その習慣を守ってきました。それなのにちっとも変わらないし、神が共におられるような確信も体験もない。そして国会で身分の高い人たちと一緒にいると、彼らが口では「神、神」と言っているが実際は人間を頼って派閥を作り、計算で生きており、彼らの空しい議論と偽善を見るたびに、そこに違和感を覚え、「何か違う!」と思っていたのです。そしてイエス様に出会って、彼の中に眠っていた聖なる憧れが動き出したのです。本物に出会うと、人の中にある神の像が動き出します。そして「どうしたらあなたのようにになれるのですか」と、尋ねたのです。でも今宵の彼の中にはまだ迷いがあります。その迷いはイエス様の死と共にふっきられ、イエス様の弟子であることを公にし、同じ議員であるヨセフと共にその遺体を埋葬しました。この老人には真理を求める熱い心と勇気があります。まるで青年のようです。信仰生活にはこのような情熱と勇気が必要です。人に流されない勇気、人を恐れず「ノー」と言える勇気、孤立を恐れない勇気、間違ったと分かったらUターンする勇気です。

●私はニコデモに似た二人の老人を知っています。一人は正教会の信徒なのに70歳を過ぎてプロテスタントの神学校に入り、高槻から片道2時間かけて毎日、天王寺の神学校に通っていました。脳梗塞で倒れて右半身が麻痺したのですが、リハビリの為に翻訳を始め、その麻痺を克服し、教会では朗読者をしていました。彼は私の学びを助けてくれた一人です。あんなおじいさんは見たことがありません。私に、真理の探究をする姿勢を教えてくださいました。

本物に出会うということが必要です。実物でもいいし、本で読んでもいいのですが「あんな人になりたい」という人を持っているかです。具体的な人生のモデル

を持ちましょう。そうすると、その人と同じようにしようとするからです。モデルがない人は向上しません。目標を持つことです。

## ②【洗礼は神の創造の業である】

そこでイエス様はニコデモに「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」(3節)と言われます。彼は新しく生まれるという意味が分かりません。「年を取った者がどうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか」と答えます。するとイエス様は「はっきり言っておく。誰でも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」(5節)と言われました。「水と霊とによって生まれる」というのは洗礼のことです。「霊」とは聖霊のことです。洗礼によって新しく生まれなければ、私にはなれないといったのです。パウロもテトスにこう書き送りました。「この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです。」(テトス3:5)ここに出てくる「洗い」というのが洗礼のことです。洗礼というのは聖霊(神)によって新しく生まれることであり、新しく造り変えられることだということです。それは人間の業ではなく神の業です。なぜなら創造は神の業だからです。神の業ですから「 sacrament・秘跡」といいます。キリスト教の救いというのは最初から最後まで徹底的に神がされる業(sacrament)であって、人間の業ではありません。人間にできるのはただキリストにつながる事だけ、救いに与ることだけです。

よくキリスト教を精神修養のような「心を磨く宗教」だと思っている人がいますが、まったくの誤解です。古い自分などいくら磨いても、たかが知れています。磨くのではなく壊すのです。昔は「頑張れば罪はやめられる」「頑張れば何とかなる」「言えば分かる」と思っていました。私の力を頼っていたのです。でも実際はそうではありませんでした。「そうではない」ということを知るために、失敗と長い時間が必要でした。私は以前のような人間の業に頼るようなキリスト教をやめ、神の業である sacrament に頼るようになりました。やるだけのことはやって後は神に期待するのです。するととても楽になったのです。

## ③【私たちの中に新しいものが生まれたのです】

イエス様はニコデモに「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」(8節)と言われました。風は思いのままに吹き、去ってゆきますが、風が来る前も、去った後も何も変わりません。クリスチャンも同じなのです。洗礼を受ける前と受けた後とそんなに変わりません。でも実際に聖霊という風はその人の中に吹き、新しい人が中に生まれたのです。だから不思議としか言いようがないのですが、新しい人間が古い人間の中に造られた(生まれた)のです。それは精神的なことではなく、非常に身体的なことです。古い人が霊的になることで

はなく、まったく違う新しい天に属する人（神に属する人）が中に入ることです。それが「肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である」（3：6）という意味です。そこで一人の人間の中に、肉によって生まれた自然の人と、聖霊によって生まれた神的な人の二つが存在することになります。これは何も驚くことではありません。イエス様も完全な神性と、完全な人間性の両方を同時に持つておられました。私たちはキリストに似た者となるのですから、両方を持つのです。

地上の体には地上の食べ物が必要なように、天の体には天の食べ物が必要です。それはみ言葉と聖体（聖餐）です。だからイエス様は聖体のことを「まことの食べ物、まことの飲み物」（ヨハネ6：55）といました。マザーテレサが「分かっていても分からなくても食べ続けなさい」言ったのは、それがまことの食べ物だからです。地上の物をいくら食べても、天の身体は育ちません。しかし神の言葉を聞き、キリストの聖体聖血を食べ続けていれば、その人の中の天的な人間が次第に成長し、時が来れば実を結ぶのです。これは長年食べている人は分かりますが、食べない人は分からないのです。最近の多くのクリスチャンを見ていると、感染症にかかって死にたくない、地上の体のことばかりを心配しています。来世に持って行けないもののことにあまりにも多くの時間と労力を注いでいます。

●渡辺和子シスターがこんなことを書いていました。修道院に入りアメリカに派遣されて、多くの修練女たちとの生活が始まった時の事です。食事中は沈黙で、大皿に盛られた品がまわってきて、各自は自分の分を取り分けます。夕食後のデザートケーキは、切り分けられていました。その時です。修練長の鶴の一声。「自分の一番手近かの一切れを取ります」。お肉が出された時も同じでした。自分の好みの焼き具合、そして大き目のものを取りたい誘惑と闘って、「これが私に与えられた一切れ」と思い定めること。これは、その後、私がいろいろな誘惑に遭った時に、それらとどのように向き合うかを教えてくれる訓練になりました。

「これが私に与えられた一切れ」と思い定めること。地上の物に、あまり執着しないことです。人は天から与えられなければ何も持つことはできません。与えられた物で満足することです。私は地上の物の事で争ったり、奪い合ったり、文句を言ったりしている人を見ると、そんなことをしている時間はないはずなのに、彼らの魂はどうなることだろうと残念になります。人は片方の目で天を見、片方の目で地を見ることはできません。天か地かどちらからなのです。神と富に、天と地に兼ね仕えることはできないのです。そろそろ天の事を考えたらどうかな、と思うのです。私たちの内に、神様が「新しい人」を創造して下さったのです。まるで畑の中に「宝物」が隠されているようなものです。その新しい人は決して死なないのです。そういう新しい体をあなたは既に持っているのです。それを大切に、それに思いと時間をかけましょう。